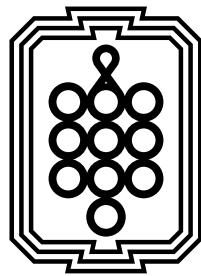


# 福岡女学院看護大学紀要

Bulletin of Fukuoka Jo Gakuin Nursing University

第 7 号 2016年



福岡女学院看護大学



# 目 次

---

## 【総 説】

人類の健康を陰で支える動物たち —疾患モデル動物の紹介—

Laboratory Animals Contributed to Human Health

—Presentation of Disease Animal Models— ..... 1

森本 正敏

## 【実践報告】

看護英語のためのポッドキャストイング —聴解力と語彙力を上達させる取り組み—

Podcasting for Nursing English

—A method for improving listening comprehension and expanding vocabulary— ..... 5

ポーター マシュー

## 【資 料】

学童期の子どもに対する母親の意識について

Survey study of mothers' consciousness of their school aged children ..... 13

原崎 聖子 篠原しのぶ 彌永 和美 渡邊 晴美

投稿内規

編集後記



# 人類の健康を陰で支える動物たち

## —疾患モデル動物の紹介—

Laboratory Animals Contributed to Human Health  
—Presentation of Disease Animal Models—

森本 正敏\*

Masatoshi Morimoto

\* 福岡女学院看護大学

超高齢化社会を迎えるわが国では、医療費の削減が叫ばれている。その医療費の中でも医療用医薬品が占める割合が多い。なぜ医療用医薬品は高価なのか。近年医薬品に対する支出を抑えるためにジェネリック医薬品の処方推奨されている。ジェネリック医薬品については、添加物や剤形の問題があり、医師の間でもいろいろと意見が異なるようである。

新薬の開発には多大な経費（数百億円）と10年を超える開発期間が必要とされている。ジェネリック医薬品は開発費が大きく削減されているので安価になる。この新薬の開発には動物が貢献している。よく知られているのは、非臨床試験での安全性試験（催奇形試験）である。1950年代に起こったサリドマイド薬害事件を覚えているだろうか。ドイツの製薬企業が、鎮静・催眠薬として開発したもので、「妊婦さんや小児が安心して飲める安全無害な薬」として発売された。しかし、奇形（アザラシ肢症を代表とする）とサリドマイドとの因果関係が明らかになると欧州各国で製造・販売が中止された。日本は、それから遅れること1年で製造・販売が中止された。この間に日本では多くの被害者を出すことになった。サリドマイドも安全試験を行っていたが、マウスとラットのみで、これらの動物には奇形が起らなかった。その後の実験で、ウサギやサルにはヒトと同様の奇形が生じることが明らかになった。これから、非臨床試験が厳しくなった。我々が飲む薬が安全であるために、動物は貢献している。体内に留置するカテーテルの類やステントなども動物に留置することにより、その安全性が確かめられている。

人類の病気は、たくさんある。治療法が確立され

ていない病気（難病）も多く存在する。製薬企業の研究者や製薬企業以外の研究者は、病気がどうして起こるのかを研究する。倫理上ヒトでは研究できないので、培養細胞（in vitro）や生きた動物（in vivo）で研究する。新薬の候補はたくさん挙げられるが、in vitroで候補を絞っていく。絞られた候補の化学物質の効果検定をin vivoで行う。臨床試験にいたるまで、多くの経費と年数が必要になる。国際的なメガファーマーに日本が太刀打ちできない理由のひとつである。

治療法の確立や新薬の開発のような研究に使われる動物を実験動物という。実験動物を大きく分類すると、実験動物、家畜、野生動物の3つに分類される。現在は一部家畜も使用するが、生産および飼育環境が制御されている動物を狭義の実験動物として扱っている。コンパニオンアニマルと異なり、実験動物は研究のために生産される動物であり、健康でなければならない。開発途上の新薬の候補を、このような健康な実験動物に使用しても目的の疾患に効果があるかどうかは分からない。そのため目的の疾患に似た症状を持つ動物を選択する必要がある。これが実験動物の中でも、疾患モデル動物という実験動物である。

2003年にヒトのゲノム（塩基配列）解析が終了した。人類は疾患と遺伝子の関係が明らかになり、大きく医療が進歩し、難病が克服されると大きな期待を持った。ヒトに最も近いとされているチンパンジーのゲノム解析も完成した。チンパンジーとヒトの塩基配列は約30億対で、ヒトとチンパンジーのDNAは約99%同じであるという報告がなされた。しかし、その後の解析技術の進歩で、ヒトとチンパ

ンジーの DNA の違いはもっとあるという報告がなされた。染色体では、ヒトが 23 対、チンパンジーは 24 対である。ヒトのゲノム解析の終了後まもなくマウスのゲノム解析も終わった。マウスの染色体は 20 対で、塩基配列は約 25 億対である。マウスではヒトと共通する遺伝子は全体の 99%と報告された。ヒトの疾患に関する遺伝子も多く見つかった。なぜマウスという小さなネズミの DNA 解析がこのように早く進んだのか。実験動物のカテゴリーの中で、マウスは特別な位置を占めている。

人類は多くの人種があり、遺伝的に多様性がある。ヒトのゲノムが解析されたと書いたが、それはある一部のヒトの解析であり、全てのヒトのゲノムが解析されたことではない。基礎研究では遺伝的に均一な動物が求められる。テーラーメイド医療が求められているように、薬の効果には個人差がある。同じ薬を投与しても利く患者さんと利かない患者さんがいる。その原因が遺伝子の違いと考えられている。遺伝子が均一な動物を使用することが研究データの信頼性を優位なものにする。遺伝子が均一な動物といえばクローン動物が挙げられる。クローン動物を多数作ればいいのだが、技術的にも経済的にも困難である。初めてのクローン動物、羊のドリーで話題になり、その後多くの種類の動物でクローンがつくられた。クローン動物は費用対効果を考えると、割に合わない技術のようである。我々のグループはウサギのクローンにトライしたが、成功せず断念した。

ここで登場するのがマウスである。実験動物として利用されているマウスは、近交系と命名されている。実験動物学の定義では、「兄妹交配あるいは親子交配を 20 代繰り返して確立される」とされている。マウスの妊娠期間は 20 日、哺乳期間も 20 日、生後 8 週齢で妊娠可能である。産まれて放置していると、ケージの中は次のマウスの新生児でいっぱいになることがある。鼠算方式で増える。したがって離乳後はオスとメスに分けて飼育しなければならない。私は学生の頃ハムスターを用いて研究したが、長期の休みに帰省して大学に戻ってきたら、ハムスターの赤ちゃんだらけで大変なことになっていたことを経験した（給餌と給水は当番制）。他に近交系が確立されている動物種としてはラットだが、

系統数はごく少数である。ヒトでは近親結婚が禁止されている国が多いが、動物も兄妹交配あるいは親子交配を繰り返すと奇形の発生率が高くなり、不妊動物が増え繁殖率も悪くなる。マウスはこの障害が出ない。研究に使われているマウスのほとんどが近交系である。マウスではヒトと共通する遺伝子は全体の 99%であるという報告もあり、遺伝子の研究にはマウスが多用されている。

実験動物を長期自家繁殖していると、時々おかしな状態を示す動物が出現する。代表的な例では、糖尿病ラットの発見がある。飼育者がいつもケージの床敷が濡れていることに気がつき、自動給水装置の故障と思い給水瓶に交換した。翌日飼育室を見に行くと給水瓶はからになり、床敷が濡れていた。給水瓶は正常だった。飼育者は糖尿病のことを思い出し、血糖値を測定すると高血糖を示していた。このラットを選抜繁殖し、糖尿病ラットを確立した。この他にも、高血圧ラット、肥満ラット、脂質代謝異常マウス、糖尿病マウスでは、1 型モデル (NOD マウス、BB ラット、LETL ラット、KDP ラット)、2 型モデル (GK ラット、OLETF ラット、Zucker fatty ラット、Wistar fatty ラット、Dahl ラット、KK-Ay マウス、NON マウス、NSY マウス、TSOD マウス、db/db マウス) が研究に使用されている。これらの多くは日本で見つかったものである。ヒトと類似の高血圧、脳卒中を自然発症する高血圧自然発症ラット (SHR)、脳卒中易発症ラット (SHRSP) は 20 世紀後半 (1963 年、1973 年) 岡本耕造京都大学名誉教授・青木久三博士はじめ、京都大学医学部病理学教室により開発された (<http://www.japan-shr.org/kinenhi.html> 参照)。免疫不全マウス、ヌードマウス、その他にも多くの病気を示すラットやマウスが見つかり、それらは疾患モデルラットおよびマウスとして、系統保存されている。これらは突然変異で生じるものであり、偶然見つかった例である。疾患に興味のない飼育者では見逃していたと思われる。疾患モデル動物は、このほかにもウサギやブタでも見ついている。偶然見つかった突然変異マウスで、SAM マウスという珍しいマウスがいる。Senescence-Accelerated Mouse (老化促進マウス) の略である。数系統が見つかるが、寿命が約 18 ヶ月 (普通のマウスは 24 ヶ月以

上生存する)である。生後12ヶ月で老化の徴候を示す。老化促進の他に、免疫不全、アミロイドーシス、記憶障害、白内障を症状として持つ系統もみつがっている。このマウスは、京都大学結核胸部疾患研究所病理部門(現再生医化学研究所再生誘導研究分野)でみつがった(<http://www.samrc.jp/SAMmouse.htm> 参照)。

次に、高脂血症のモデル動物として有名なWHHLウサギの起源となる突然変異ウサギの発見の経緯を紹介する(<http://www.med.kobe-u.ac.jp/iea/gaiyou-1.html> 参照)。渡辺嘉雄神戸大学医学部附属動物実験施設前教授はオスの日本白色種ウサギ(100日齢)を用いて給餌を毎日の制限給餌から隔日に変更することがウサギの血清生化学パラメーターに与える影響を検討した。その実験に使用したウサギの中に血清総コレステロール値が正常ウサギの約10倍の高値を示すウサギを発見した。このウサギの高コレステロール血症は一時的なものではなかったことから、渡辺前教授は突然変異による高脂血症と判断し、系統開発を開発した。高脂血症ウサギを「異常動物」として無視せずに系統開発に取り組んだことは渡辺前教授の先見性を表している。1973年は、後にノーベル賞を受賞したGoldstein JLとBrown MSがLDL receptor pathway 仮説を提唱した年であり、現在世界中で高コレステロール血症の第一選択肢として使用されているスタチンを国内製薬会社の研究グループが世界で最初に発見した年でもあった。どちらの研究にも、WHHLウサギが貢献した。

これらの突然変異を固定するためには、育種学の知識(遺伝学的統御)と長い時間を必要とする。自然発症疾患モデル動物とは、遺伝的に固定した表現型を示すミュータントである。突然変異体によっては生殖能力がないものがある。特にホモ型に多く、その場合はヘテロ型で維持する。これらの突然変異動物は多数の遺伝子が関与していることが想像される。遺伝子を操作する技術の確立が、偶然性と長期間が必要な自然発症型から、必然性と短期間の疾患モデル動物の作出を可能にした。

遺伝子操作技術は大きく2つの技術に分類された。ひとつめは目的遺伝子を挿入する(トランスジェニック)方法で、トランスジェニック(以下、TGとする)

動物、ふたつめは目的遺伝子の機能を破壊する方法で、ノックアウト(以下、KOとする)動物である。TG動物は、マイクロインジェクション法を使用する。KO動物はES細胞(胚性幹細胞)を使用する。

我々がこれまで行ってきた研究を紹介する。死因の上位を占める脳血管障害、心臓血管障害、動脈瘤破裂は、引き金となっている動脈硬化が生活習慣病(高血圧、高脂血症、肥満、糖尿病、これらを死の四重奏と呼んでいる)により引き起こされる。我々は、生活習慣病に関係する多くの遺伝子をウサギの受精卵に注入し、TGウサギを作成し、病理学的変化を調べることにした。

ウサギをヒトの疾患モデルへの利用として考えた場合、一番大きな生理学的特徴のひとつは脂質代謝がマウスに比べてヒトに近いということである。たとえば、リポ蛋白分画についてみると、マウスではHDLが主体であるが、HDLは善玉コレステロールと称され、抗動脈硬化に働く。このため、マウスでは非常に動脈硬化を惹起するのが困難である。また、マウスでは体が小さいため、心臓の冠状動脈などの病変の観察はほとんど不可能で、大動脈においてさえその観察は難しい。それに対してウサギでは、血中のリポ蛋白分画はヒトと同じくLDL主体である。また、コレステロール食に敏感で、動脈硬化を容易に誘導することができる。それから、体の大きさから、冠状動脈の詳細な観察も可能である。これらはTGウサギを考えた場合も大きな利点の一つとなる。しかし、ウサギを使うことには困難さもある。移植胚あたりのTGウサギの産仔数は、約0.3%である。つまり、1,000個DNAを注入した受精卵を移植して、やっと3匹のTGウサギを得ることができる。1匹のメスウサギには約30個の受精卵を移植するので、仮親は30匹準備しなければならない。ヒトでの遺伝子の中には、ウサギにトランスジーンすると致死的なものもあるようである。多くの遺伝子がかかわる疾患の研究は大変な労力と研究費が必要になる。

ではKOウサギはどうかというと、ウサギのES細胞が確立していないため、KOウサギを作成することは不可能である。2008年にラットのES細胞が樹立された。2009年にウサギのES細胞も樹立された。さあこれからKOウサギを作るぞとい

うころに、新しい技術が報告された。それが、ゲノム編集技術である。1996年にZFN (zinc-finger nuclease) 法、2010年にTALEN (transcription activator-like effector nuclease) 法、2012年にCRISPR/Cas9 (clustered regularly interspaced short palindromic repeats / CRISPR-associated genes) 法が報告された。これらは、人工制限酵素を用いて任意のゲノム配列を置換、挿入、削除することが可能である。

KO動物は遺伝子のなかに薬剤耐性遺伝子を挿入して、遺伝子の機能を止める方法であるが、ゲノム編集は、傷ついたDNAは自ら修復するという性質を利用しており、複数の遺伝子の機能を止めることも可能である。欠損遺伝子を挿入することも可能である。この技術は臨床応用されるようでもある。

ヒトに近いサルを研究に用いるためには倫理的問題、非常に高価なため研究費の問題、輸入に頼るため輸送や検疫の問題があり、ハードルが高かった。しかし、マカク属と同類（真猿類）のコモンマーモセットは小型で繁殖が容易であるという利点を生かし、コモンマーモセットのゲノム編集による疾患モデル動物の作成が進んでいる ([http://www.amed.go.jp/news/release\\_20160701.html](http://www.amed.go.jp/news/release_20160701.html) 参照)。今後、医薬品の開発に大きく貢献すると思われる。またiPS細胞とゲノム編集を組み合わせ、臨床応用することが山中伸弥教授からも公表されている。ゲノム編集は既に米国においてAIDS治療のため臨床応用されている。この技術がこれからの主流になりそうである。

最新のマウス、ラット、サルの情報については、文部科学省が実施している、ナショナルバイオリソースプロジェクト (<http://www.nbrp.jp/>) を参照されたい。

最新の話題については、次回に紹介する。

---

## 参考図書

- 森脇和郎 監修 自然発症疾患モデル動物 中山書店 1999  
森脇和郎 監修 小さくて頼もしいモデル動物 羊土社 2014



# 看護英語のためのポッドキャストイング —聴解力と語彙力を上達させる取り組み—

Podcasting for Nursing English  
—A method for improving listening comprehension and expanding vocabulary—

ポーター マシュー\*  
Mathew PORTER

## 要旨

本稿では、英語聴解力と語彙力を向上させるために作成した看護英語学習用ポッドキャスト教材の開発過程、内容、初期段階の評価を報告する。ポッドキャストの制作においては、原稿に使用する言葉は単語頻度順位の高いものを利用するように心がけた。しかし、医学、薬剤学、解剖学、生物学の専門用語のような一般会話や印刷物で頻繁に出現しない未知語を使用することが避けがたいため、ポッドキャストの難易度は高かった。定期的にポッドキャスト教材を活用すれば、医療のトピックに密接に関係する言葉や頻度順位の低い言葉に複数回遭遇できる。教室における受講者数の多さや習熟度の差があるため、リスニング活動の弊害となる。一方で、ポッドキャストは学生が好きな場所で好きな時間に学習ができる利点がある。ただし、ポッドキャスト教材の作成にかかる負担が大きく、他大学の看護英語教員と共同作成を推奨する。

キーワード：ESP、看護英語、聴解力、語彙力、ポッドキャスト

\* 福岡女学院看護大学

## 1. はじめに

我が国に滞在する外国人の増加に伴い、医療現場では外国人患者の受療率が益々増える見込みである。その中で、多くの外国人患者は日本語で困ることが予想されている。しかし、今日医療従事者が外国人患者に適切なケアを提供するための外国語の運用能力が発揮できるとは言いきれない。これから医療従事者となる学生が外国人患者と円滑に対話するためにスピーキング能力、リスニング能力と専門的なボキャブラリーや多文化知識を徹底的に身につけなければならないと考える。特に医療従事者の中で患者にとって最も身近な存在である看護師の場合、患者の私生活や病状のあらゆる面についての確にコミュニケーションをとれることが重要であると考えられる。しかし、看護大学や学部において教育時間、英語授業環境などの制限がある中、看護師を目指している大学生の英語運用能力を向上させることは困難である。そこで本稿では、看護学

生のリスニング能力の向上及び専門的なボキャブラリーと多文化の視野を広げるために開発された英語学習用ポッドキャスト教材の開発初期段階の報告と評価について述べる。この報告を通して、本学の看護教員にポッドキャスト教材作りの背景に関する問題とポッドキャストの内容、その通過評価を知ってもらい、この教材を看護学生をはじめ、看護教員や現役看護師の、より効果的な英語学習に生かしてもらうことを期待する。

## 背景

簡単に言うとポッドキャストとは、誰もが作れるネットで配信できるラジオ番組のようなものである。さらに視聴者がポッドキャストの番組に登録すれば、作成者が新規のエピソードをインターネットにアップロードするとそれが自動的に端末にダウンロードされる。ポッドキャストは新しいものではなく、2001年に発売され普及した。iPodの特性を生かし、ポッドキャストが新しいメディアとして創

出された。そして、2006年にはポッドキャストが言語学習における消費者（学生・教員）と作成者（学生・教員）に既に広く利用される教材となった（Chinnery, 2006）。スマートフォンを活用すると学生がポッドキャストを好きな場所で好きな時間に聞けるという利点がある（Selwood, 2014）。さらに、ポッドキャストはモバイル端末だけではなく家や大学のパソコンからでもポッドキャストのウェブサイトに行けば聞くことができるのでその利便性は高い。この利便性を踏まえ、英語リスニング能力に伸び悩み看護学生の対策として看護英語学習用ポッドキャスト「Nursing English Weekly」という教材を制作した。

現在の新生は中学から英語教育を受けてきたにもかかわらず、大学の入学時に多くの学生のリスニング能力が不足しているのが現状である。平成26年に学習指導要領に基づき、全国の高校3年生約7万人（国公立約480校）の英語力を調査するために4技能（読むこと、聞くこと、書くこと、話すこと）を対象とした試験が行われた（文部科学省, 2015）。この試験はCEFR（Common European Framework of Reference: ヨーロッパ言語共通参照枠）を配慮し設計された。CEFRとは異なる試験を相互に比較することが出来る熟達度別の6段階からなる国際標準の参照枠である。段階ごとに言語を使って「具体的に何が出来るか」という形で言語力をわかりやすく説明する能力記述文「can-do descriptor」が設定されている。約25分の聴解試験は多肢選択式で、18問の課題解決問題と18問の要点理解問題から構成され、もっとも低いレベルのA1から中上級レベルのB2までのレベルを測定できるように準備された。結果、約76%の生徒の聴解力がA1のレベルにとどまることが分かった。このレベルの総合聴解力の能力記述文によると、学生が「意味が取れるように長い区切りにおいて、非常にゆっくりと注意深く発音してもらえれば、発話を理解できる」や「当人に向かって、丁寧にゆっくりと話された指示なら理解できる。短い簡単な説明なら理解できる」（Council of Europe, 2001）が、英語母語者の対話やテレビ、ラジオを聞き取り、理解することはできない。6年間英語を勉強しても過半数の学生のリスニング能力が初級のレベルにとど

まった要因は2つあると考える。

まず、音声面から日本語と英語を比較すると音節構造、リズム、音変化の規則等の違いが挙げられる。例えば音節構造ならば、日本語は開音節、英語は閉音節の傾向がある。具体的に言うと日本語の場合には、開音節というのは、撥音「ん」と促音「っ」以外、音節（即ち平仮名一文字）は必ず母音で終わることになる。一方英語では、閉音節の傾向が強くと、子音で終わる音節が多くある。この事実により、日本語母語者は子音で終わる音節の後に母音をつけがちである（Ohta, 2004）。スピーキングの場合、これはカタカナ英語と言われ、日本人でない話し相手にわかってもらうことを妨害する。例えば、仮に英語圏のマクドナルドにカタカナ英語でサラダを注文する日本人がいるとしよう。簡単な英語で「Salad, please.」と言ってみるが、相手は聞き取れないだろう。この発話を音節構造から見ると、英語で「'sa-ləd 'plēz」のように3つの音節からなるが、カタカナ英語では、「sa-la-da pū-'lē-zū」のように母音の発音が異なるのはもちろん、音節の数も2倍になる。このような音声面での違いは日本人が英語を的確に聞き取ることも妨害する原因となっている。これに加えて、学生が英語における音変化（脱落、連結、音挿入等）に不慣れなため、主にペーパーで覚えた単語を聞いても聞き取れない可能性が高いと考える。例えば、中学校で覚えた「interesting」の発音は「インタレスチング」ではなく、2番目に強調しない母音があるためその音節は次の音節と合併することによって「'in-trə-stiŋ」のように発音することが多い。従って、英語母語者がナチュラルスピードで発する発話を理解することが困難であると考えられる。

そして、語学習得の面からリスニング能力を養成したり、ポキャブラーを習得したりする学習活動が十分になされていないことも挙げられる。中高6年間で学校が提供できる授業時間だけではリスニング能力をはじめ、十分な英語の運用能力を身につけるのは不可能である。2016年度の新入生はまだ旧学習指導要領（平成10年度改訂）が適用され、中学では英語の授業時間数が毎年105時間であり、高校ではコースにより毎年105時間以下から141時間以上と幅広い授業時間数になる。ベネッセ(2014)

が全国の中高生を対象に、英語学習の実態について調査した結果、回答した約6,300名のうち8割が、授業中に「英文を日本語に訳す」や、「先生の説明を聞く」、「英語を読んだり書いたりして覚える」という学習をしていることが明らかになった。授業の予習と復習についても、「教科書本文を和訳」という学習方法を6割の人が回答していた。これではリスニング能力を向上させる学習活動とは言えない。

また、語彙力については、出現率の高い頻度順の6,300位までの言葉を習得することが英語学習にとっては重要であり (Cobb, n.d.)、この2,000位までの言葉が一般英語のテキストや会話に出現する言葉の約80～85%を占めるため、さらなる勉強の土台となると言われている (Nation, 2008)。しかも、同じ言葉を20回以上かつ多種多様な文脈に目にするのがなければ、その言葉を習得する可能性が低いと考えられる (Waring & Takaki, 2003)。中高の教科書にはこの2,000語が一部含まれているが、これらの言葉の出現回数は20回以上に満たない。

音声面での上記のような妨害を乗り越えるために発音の指導のほか、学生の習熟度に合う内容の英語を聞く多くの機会が必要である。しかし、看護大学の授業環境もクラス規模、授業時間数、履修生の英語力の差等によって、適切な指導と教材や機会を学生に提供するのは物理的に困難である。3つの必須英語科目で1.5年間で週一回90分の授業を45回しか履修できない。さらに必須英語科目の受講者数は50人を超え、学生の英語力にばらつきがあるので、個別に発音の指導も適切なリスニング教材も提供しがたいのが現状である。よって、リスニング能力を伸ばすために看護英語学習用のポッドキャストを学生に提供することが上記の背景を克服するような取り組みになると判断した。また、看護学生のために基礎英語だけではなく専門的な語彙や医療的なテーマを用いる教材にも接触することができる考えた。

## II. 方法

リスニング能力を伸ばすことはこれまで配慮してきたため、ポッドキャストを開発する1年前から別の取り組みを始めた。その取り組みの基礎となる

教材は Voice of America Special English (以下 VOA SE) というニュース番組である。アメリカ合衆国政府が運営する国際放送局である VOA SE ではラジオやインターネットで時事ニュースや特集のエピソードが放送される。外国人の視聴者が対象であるため、限られた言葉を使い、アナウンサーがゆっくりとはっきり発話する。当時、医療関連のエピソードが少なく、エピソードの長さやエピソードに含められたそのままの英語のインタビュー等で学生が苦勞していた。そして、当時の VOA サイトは特別な学習活動の準備がされておらず、筆者はエピソードごとにプリントや学習活動を設計する必要があった。これらの欠点を考慮し、著者はポッドキャストに乗り換えることを検討し始めた。

その結果は、英語学習用のポッドキャストや看護学のポッドキャストが大量に存在するということがあった。しかし、看護の分野に関連する英語学習用のポッドキャストはほとんどなかった。英語圏の看護学生のために制作した看護学のポッドキャストはスピードや表現の難易度のままに日本の看護大学の1年生に使用することは現実的ではなかった。だから、筆者が自らポッドキャストのエピソードを開発すれば、トピックと言葉の難易度や話すスピードのような重要点を配慮しながらポッドキャストを制作することができる考えた。

ポッドキャストを聞くだけではなく聞く以外の学習活動にも効果をもたらすと考え、広島大学の Selwood 氏が計画・作成した「Hiroshima University's English News Weekly」というポッドキャストを参考にした。このポッドキャストは時事ニュースを中心とし、ポッドキャストのほか、10ページ以上の学習活動のプリントを pdf 形式でポッドキャストと一緒にウェブサイトで提供している (Selwood, 2013)。筆者は Selwood 氏の許可と助言を受け、同じようにポッドキャストとプリントを学生に提供することにした。

ポッドキャストの開発が進み、ポッドキャストを発信するためにワードプレスという無料のブログプラットフォームを採用し、「Nursing English Weekly」というウェブサイトを作成した。ブログの特徴の1つは関連する投稿を即座に集約するための「タグ」である。「タグ」を使用すれば、エピソード

ドの分類ができ、閲覧する者が容易に関連するエピソードを探し出すことができる。

2016年度の前期に毎週新規エピソードをサイトに投稿する目標を立てた。エピソードとプリントを作成するには下記の過程を踏み、トピックの発想からエピソードのアップロードまでには約10時間を要した。

- 1) トピックの設定と下調べ
- 2) 原稿の作成
- 3) プrintの作成
- 4) エピソードの録音・制作
- 5) エピソードとプリントのアップロード

トピックの設定はSNSで共有した話題や医療に関連する最新ニュースを中心に選定した。これは、日常生活で学生が日本語で耳にしたトピックである場合、英語で聞いた場合でも、母語で既有知識を呼び覚ますからだ。正確な情報を伝えるのが重要なので、原稿の下書きを書きながら医療サイト(Mayo Clinic, WebMD等)で専門的な情報を調べ、自らの理解も確認する。エピソードの録音はRecorder for Dropboxという無料のiPadアプリを使用した。それから無料音声編集ソフトAudacityにより音声処理をした。その後編集を行い、mp3形式のファイルが完成する。

5ページからなるプリントはMS Wordで作成し、pdf形式としてサイトに投稿する。プリントの内容と目的を以下に示した。

- 1) プレリスニング活動1: 偏見や予備知識を問う正誤問題
- 2) プレリスニング活動2: 頻度の高い言葉や専門用語を導入するマッチング問題
- 3) リスニング活動: リスニング中、原稿にある10個の間違い探し
- 4) ポストリスニング活動: 4択の聴解問題
- 5) 任意活動: エピソードのテーマに関連するウェブサイトを使い、読んだり聞いたりしてから学生が自分の意見や感想、サイトに掲載した情報を書く。

サイトに新規エピソードとプリントを掲載したあ

と、学習管理システム(Google Classroom)で学生に知らせた。それからGoogle Classroomにポッドキャスト教材が掲載されたサイトのリンクと課題の提出期日を「Assignment」として書き込んだ。Google Classroomに「Assignment」を設定すると学生に自動的に通知されるのである。

学生は提出期日までに授業外で新規のエピソードを何回も聞き、プリントの問題を解かなければならない。そして、提出物については学生が完成したプリントを1枚ずつ携帯やスマホで撮影し、全写真をGoogle Classroomで提出する。学生全員が提出を完了すれば、筆者が答え合わせ用のプリントをサイトに投稿するが、答え合わせの作業は各自に任せることになる。成績に関しては、プリントの得点を使用せずに学生がプリントを完成したか、提出期日までにGoogle Classroomに投稿したかということで評価する。

### III. 結果

2016年前期に合計13話の医療に関連するポッドキャストとプリントをウェブサイト準備することができた。今回学生からのデータがないため、本節では制作したエピソードの内容や出現した言葉を分析する。

まず現在のエピソードのタグを見ると、異文化と病気の体験談、公衆衛生、医療ニュース、生活の質(QOL)と外国人患者の6つの項目から構成される。多様なトピックを選定したが、公衆衛生(5回)と異文化(4回)に関連するトピックが最も多いタグになった。長さについては、初回のエピソードは3分55秒で最短のエピソードになったが、話の内容が薄く、ポッドキャストが短すぎると感じたので5~6分のエピソードを作成することにした。制作した13話のエピソードのトピック、タグ、と長さは表1に示した。

表1 エピソードのトピック、タグ、と長さ

	トピック	タグ	長さ(分)
1	マスクの使用	異文化	3:55
2	抗生物質耐性菌株	医療ニュース	4:34
3	肩痛	病気の体験談	5:38
4	アメリカでの授乳現状	異文化	5:30
5	三次喫煙	公衆衛生	5:33
6	蚊媒介疾病	公衆衛生	5:59
7	予防接種	公衆衛生	6:05
8	パーキンソン病	生活の質 (QOL)	5:15
9	体温の測り方	異文化	4:13
10	乳がん	公衆衛生・疾病	5:20
11	アルツハイマー病	病気体験談・疾病	5:16
12	疱疹ウイルス	異文化・公衆衛生	5:29
13	外国人の患者	外国人患者	5:19
		平均	5:14

エピソードに使用した言葉の分析を表2に示した。使用した言葉の合計（トークン）は342語から469語よりなり、使用した単語数の平均は432語であった。同じエピソードに複数回出現した言葉は沢

山あり、重複した言葉を1回のみと数えた場合、使用した言葉の平均は209語（タイプ）になる。語彙の多様性から見ると、タイプ・トークン比（TTR）の平均は.49であった。これは例えばTTRが1で

表2 エピソードに使用した語彙の分析結果

	トークン(語)	タイプ(語)	TTR	2K
1	342	195	.57	83%
2	372	192	.52	85%
3	439	216	.49	84%
4	417	217	.52	83%
5	469	234	.50	83%
6	451	218	.48	78%
7	439	212	.48	77%
8	419	226	.54	83%
9	376	162	.43	82%
10	444	233	.52	81%
11	432	189	.44	87%
12	468	211	.45	82%
13	543	207	.38	86%
平均	432	209	.49	83%

あるとしたら、トークンとタイプは同数であり、同じ言葉を複数回使うことはないということである。語彙の多様性が低い場合、1回のみ使用した言葉は少ないのでそのテキストの難易度が低いと考えられる。それぞれのエピソードの平均 TTR は .49 であり、つまり使用された言葉のおよそ 50% が複数回出現した。

エピソードの語彙を分析するため、Cobb 氏が作成したオンライン Vocabulary Profiler を使い、45 億語の英米 BNC-COCA-25 コーパスで出現語の頻度順を探った。多様なコーパスがあるが、コーパスの構築や特徴は本稿では扱わない。表 2 の 2k とは、単語頻度表の 2,000 位までの言葉の出現率のことを表している。2,000 位までの言葉は平均 83% 出現したが、残りの平均 17% の言葉は 2,000 位以上のものであった。この言葉を調査すると専門用語（医療従事者同士が用いる言葉）と一般専門用語（患者など、一般の人が用いる医療用語）、固有名詞、トピックに密接に関連する言葉（例 エピソード 6 の蚊媒介疾病では mosquito 等）の 4 つに分類することができる。BNC-COCA-25 のコーパスは 25,000 位までの順位で作られており、この 4 つのカテゴリーの言葉は 10,000 位以上のものが多く、リストにないものもあった。特に専門用語や一般専門用語である医薬品名、予防接種名、病名、症状、解剖学の言葉、生物学の言葉は頻度リストの低い順位に出現しており、氏名と地名はリストになかった。エピソードによって、この頻度の低い言葉は複数回出現したものと 1 回のみのもので分けることができた。

#### IV. 考察

看護英語学習用のポッドキャストを開発する理由は 4 つあった。英語を聞く機会を増やすことと難易度を配慮した教材を学生に提供すること、医療に関連するトピックや専門用語を学生に紹介すること、リスニング能力の向上に対する授業環境への妨害を取り除くことである。以下では、この 4 点を考慮しながら今回のポッドキャストの取り組みを評価していく。

まずは、毎週エピソードを 1 回かそれ以上聞けば、学生の英語を聞く機会が増えたと言えるもの

の、ポッドキャストを聞くだけで学生のリスニング能力が上達したり、ボキャブラリーが増えたりしたとは言えない。効果を上げるためには、さらなる学習活動が欠かせないものである。プリントは既有知識を呼び覚ますことや要点理解の問題、言語面に意識を向けさせる問題等のような効果的な学習活動から構成されたが、学生が自己の管理でリスニングとプリントを行うため、ポッドキャスト教材の効果に疑問が残る。学生の提出の傾向から見ると、真剣なおかつ丁寧に課題に取り組んでいる学生はいるが、ポッドキャストを聞かずに何かの方法でプリントを完成させ、画像を投稿する学生もいたにちがいない。よって、課題の設定や提出方法を考え直す必要性はあると考えられる。さらに音声を聞きながら聞いた音声を即座に復唱する活動「シャドーイング」を行えば、英語の音に慣れ、英語の能力を向上する可能性が高くなる（鈴木、2007）。今後シャドーイング活動を紹介するビデオや説明をあらかじめ学生に提供し、シャドーイング活動を促進する指導活動の必要性があると考えられる。

次は、エピソードの原稿を作成する際には、言葉の難易度と学生の習熟度を配慮し、難度が高い言葉をなるべく避けようとしたが、専門用語の多い医療分野では不可能だった。それにしても、今回のポッドキャストの原稿には 30 ~ 50 語の未知語があり、円滑にポッドキャストを理解できると言い難い。また、看護のような専門的なテキストになると、難解度の高い専門用語が多く、同じテキストに複数回出現しないかぎりそのような言葉を習得する可能性は低いと考えられる。よって、今まで使用した専門用語が新規のエピソードにも使われると、学生がその専門用語を再び目にするような機会を提供すれば、語彙力が強化される機会になる。

難度の高い医療専門用語が出現しても、適切なボキャブラリー学習活動を設計すれば、学生が英語で医療に関連する話を聞き、英語に聞き慣れることだけではなく、外国人患者を満足させるようなケアをすすんで提供することが期待できる。学生の動機付けとして、トピック選定や原稿の下調べを学生に任せることやエピソードの数が増えたら、新規のエピソードではなくタグを使用し、過去の面白そうなエピソードを学生に自由に選んでもらうこともこ

れからは導入できるのではないかと考える。

最後に、従来の授業環境では、学生1人1人の練習を見守ることや個人へのフィードバックを行うことが不可能だったために、看護師が外国人患者と英語でコミュニケーションをするのに必要なリスニング能力作りを効果的に養成するのは困難だった。ポッドキャスト活動においては、学生自らが理解の確認や答え合わせ、再挑戦などを行う機会が作れた。しかし、英語学習に対する動機づけが内発的なものではなければ、学生がポッドキャスト教材を使わずに、完成したプリントを提出することができる。これを防ぐためには、筆者は学生の内発的な動機づけや英語学習に対する関心に重点を置かざるを得ないと考え。

そして教員の面においても、今後のポッドキャストに関わる作成・制作の負担を検討する必要があると考える。新規エピソードを発想する段階からアップロードするまでには、約10時間を要するが、前述のような時事英語のポッドキャストは看護英語のポッドキャストより長く、プリントのページ数も多いにもかかわらず、作成・制作の所要時間が2時間ほど少なかった (Selwood, 2013)。教員が医療関係者ではないということもあり、テーマの下調べや情報の的確さの確認などに時間を要する。新規エピソードを週1回のペースでアップロードすることが困難であったため、ほかの看護英語の教員と共同作成・制作することを検討している。これによって、教員の一人当たりの負担が少なくなり、ポッドキャストの利用者には多彩な英語を聞く機会を提供できるようになる。

## V. おわりに

ポッドキャストのような授業外で取り組むリスニング教材を提供することで、学生が自分に合う環境や自分なりの方法で勉強することができる。週1回リスニングの課題をこなすことで英語に耳を傾ける習慣にもなり、プリントも完成することによりリスニング能力が伸び、ポキャブラリーも増える。また、看護英語学習用のポッドキャストは医療に関連する文化の違いや最新ニュースのトピック選定で看護職を目指している学生に英語学習の関心をもたらすよ

うな学習法である。英語の授業の履修後や卒業後でも英語を自学自習するきっかけにもなると考える。

学生からポッドキャストの評価や定量的なデータを調査しなかったのは本稿の弱点である。今後、ポッドキャストは学生の英語力、看護の視野、英語学習に対する動機や関心などにどれほど影響があるかを調査する必要性が示唆された。

## VI. 文献

- ベネッセ. (2014). 中高生の英語学習に関する実態調査 2014.  
<http://berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=4356>
- Chinnery, G. M. (2006). Going to the MALL: Mobile Assisted Language Learning. *Language Learning & Technology*, 10 (1), 9-16.
- Council of Europe (2004) / 吉島茂, 大橋理枝 (2009). 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠. 70-71, 朝日出版社, 東京.
- Cobb, T. Why & how to use frequency lists to learn words. 2016-6-13.  
<http://www.lexutor.ca/ResearchWeb/>
- 文部科学省. (2016). 平成26年度英語教育改善のための英語力調査事業報告書.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm)
- Nation, P. (2008). *Teaching Vocabulary*, 7, Heinle, Boston.
- Ohta, Kota. (2004). Phonological Differences between Japanese and English: Several Potentially Problematic Areas of Pronunciation for Japanese ESL/EFL Learners. *Asian EFL Journal*, 1-19.
- Selwood, J. (2013). Podcast Potential: Podcasting at Japanese University. *Hiroshima Studies in Language and Language Education*, 16, 15-30.
- Selwood, J. (2014). English Podcasting: A Study of a University Podcast-Based Course. *Hiroshima Studies in Language and Language Education*, 17, 142-156.
- 鈴木久実. (2007). シャドーイングを用いた英語聴

解力向上の指導についての検証 . STEP Bulletin, 19, 112-124.

Waring, R. and Takaki, M. (2003). At what rate do learners learn and retain new vocabulary from reading a graded reader? Reading in a Foreign Language, 15-2, 130-163.



# 学童期の子どもに対する母親の意識について

Survey study of mothers' consciousness of their school-aged children

原崎 聖子\*  
Seiko Harasaki

篠原しのぶ\*\*  
Shinobu Shinohara

彌永 和美\*\*\*  
Kazumi Iyonaga

渡邊 晴美\*  
Harumi Watanabe

\* 福岡女学院看護大学 \*\* 福岡女学院大学 \*\*\* 活水女子大学

## I. はじめに

我々は2003年より、ブックスタート経験とその後の子育て及び子どもの生活との関連性について、縦断的に意識調査を継続している。

そもそもブックスタート運動は、1992年に英国バーミンガム市で始められ、わが国においても2000年の「子どもの読書年」推進会議で紹介されその後急速に広がり、2016年8月31日現在、全国969市区町村で実施されている（2016年9月30日現在NPOブックスタート調べ）。

ブックスタートは、保護者へ絵本についての説明をした後、実際に絵本を提供し利用してもらうことで「保護者と赤ちゃんが、絵本を介してゆっくりと心ふれあうひとときを持つきっかけをつくる」ことが目的である（ブックスタート（編）2010）。またこのことは、乳幼児期の育児に戸惑う保護者に対して、子育て初期に絵本を有効活用することで育児への不安を少しでも軽減するという子育て支援としても大いに期待されている。

福岡県小郡市では、市立図書館を中心に他機関との協力のもと2003年9月の10ヶ月健診時にブックスタートを開始した。また、同時にブックスタートに関連して、「本に関する質問」「子どもの日常生活」、そして「親の子育て」についての調査も進められた。福岡女学院は2003年より小郡市のブックスタート事業に継続して協力しており、特に2009（平成21）年10月には「ブックスタート調査に関する基本協定書」を締結し、データの集計、分析および研究成果の発表を担当することとなった。

そして、これまで縦断的に10ヶ月、18ヶ月、

37ヶ月、就学前の健康診断期には保護者から、そして学童時に入った小学3年時及び小学6年時には保護者だけではなく児童からも日常生活に関する回答を得て、保護者が受けたブックスタートの影響が子どもや家族のその後の日常生活や親の子育て観にどのように現れるかという点を中心に検討を進めてきた。

その結果、親の子育て観は子どもが小学6年生になった時点でも「保護者がゆったりとした気分になれる」「子育てによって自分が成長している」などブックスタートを受けた親の得点が有意に高くなっていったが（原崎他、2016）、子どもの日常生活との関係では、小学3年時まで「本をもらうとうれしい」など本に関する項目や「おうちの手伝いをするのが好き」などの項目で親がブックスタートを受けた群の児童が有意に高かった（原崎他、2012）のに対して、小学6年時においては親のブックスタート経験による子どもの読書活動や日常生活の差はほとんど見られなくなっていた（原崎他、2016）。

そこで我々は、その理由を探るために、分析の観点を、ブックスタートの影響から学童期の発達に変えて「子どもの日常生活」について子どもの回答を比較したところ、6年児は3年児に比べてマンガやゲームに関わる時間が多くなり、また、家で手伝いや家族との外出を楽しんでいる割合が少なくなっていた（原崎他、2015）。

つまり、学童期中期の3年生と学童期後期6年生ではその生活実態や家族、親子の関係性が変化する時期ではないかということが考えられた。

実際、「年齢に伴う社会化過程の変化」（柳（1974、上田（1996）引用）の表によれば主な人間関係とし

て小学校中期までは「父母」の存在が見られるが、小学校後期では「父母」に代わって「同姓の友人」が登場している。

したがって、この時期、友人の影響が大きくなり親の影響力が減少していることが考えられる。

一方、家族、特に母親は、この現象をどのように受け止めているのであろうか。上田によると乳幼児期に比べて学童期は親の子どもに対する身体的保護の必要性はかなり減少し、一緒にいる時間は少なくなるにもかかわらず、子どもにとってその存在価値は変わりないと述べ、母親は依然として子どもの世話に時間を掛け、欲求により早く反応するとも書かれている（上田, 1996）。

しかしながら、子どもの人間関係が親から友人へと移行する学童期後期までも親自身は子どもとの距離を維持し続けるのであろうか。

そこで、今回の研究目的は母親の意識に着目して「子育て観」や親の目から見た「子どもの日常生活」が、小学3年時と小学6年時ではどのように異なるのかということを検証することとした。また、家庭内での様子を検討するために、子どもの性別での比較、父親の意識との比較についても検討し、母親の学童期の子育て観について考察を進めるとともにブックスタート体験との関係について言及することとする。

## II. 研究方法

**1. 調査対象** 福岡県小郡市内5つの小学校の3年生及び6年生の保護者で、回収数2478（3年時1248、6年時1230）の内、回答者が母・父以外のもの及び不備のあったものを除いた。実数は以下の通りである。

3年生 母親 計1002名、父親 計44名  
 6年生 母親 計968名、父親 計41名  
 尚、いずれも同一5校で実施されたが転校、転入生があり対象者の全てが同一ではない。

**2. 調査方法** 質問紙調査法（縦断的調査）。

**3. 調査期間** 調査期間は2011年5月～2015年6月である。各学年を以下の通り2期に渡って実施した。

3年生 2011年5月、2012年5月

6年生 2014年6月、2015年6月

- 4. 調査手続** 配布及び回収は福岡県小郡市主導で実施され、各学校宛に学校長、担任宛の依頼文並びに保護者への調査依頼文と質問紙が郵送された。児童は各クラスで渡された調査依頼文と質問紙を持ち帰り、保護者が記入後学校へ持参し回収された。回収された質問紙は個人が特定できないように小郡市図書館にてナンバー化された。
- 5. 質問内容** 質問21項目は2003年のブックスタート調査開始時に、東京杉並区および北海道恵庭市の調査内容を参考に作成したもので「子どもの日常生活について」10問、「子育て観」について11問である。
- 6. 評定尺度** 質問は5段階評定で5:「非常にそう思う」～1:「まったくそう思わない」となっている。
- 7. 分析方法** SPSS Statistics for Windows(ver.23)使用。統計解析「対応のないt検定」により有意確率、度数、平均値、標準偏差を算出した。
- 8. 倫理的配慮** 本研究は福岡女学院看護大研究倫理委員会の承認を得たものである（No. 16-6）。

## III. 結果

### 1. 子どもの年齢による比較

#### 1) 子どもの日常生活について

表1 子どもの日常生活についての母親の意識(学年比較)

項目	学年	度数	平均値	標準偏差	t	有意確率 (両側)
学校での出来事をよく話す	3	1000	3.85	.928	-.019	n. s.
	6	966	3.85	1.002		
親子でよく会話をする	3	1001	4.05	.795	-.435	n. s.
	6	968	4.06	.847		
お手伝いをよくしてくれる	3	1001	3.34	.969	-.809	n. s.
	6	968	3.37	1.020		
家族で外出することを好む	3	1000	3.97	.936	4.005	***
	6	967	3.80	1.010		
親の行動に興味を持っている	3	1000	3.83	.879	3.275	**
	6	967	3.69	.937		
弟妹や小さい子どもの面倒をよく見てくれる	3	994	3.60	1.043	-.333	n. s.
	6	959	3.61	1.104		
天気の良い日は戸外で良く遊ぶ	3	1001	4.04	.961	7.008	***
	6	968	3.72	1.088		
友達をよく家に連れてくる	3	998	3.30	1.139	3.938	***
	6	965	3.09	1.136		
いろいろな本をよく読んでいる	3	999	3.26	1.103	.411	n. s.
	6	965	3.24	1.515		
よく勉強をしている	3	999	3.05	1.006	-2.145	*
	6	966	3.15	1.040		

t検定 \*P<.05 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

母親が捉えた子どもの日常生活の学年差を、表1に示す。これによると有意差が見られる項目が5項目あり、3年時が高い項目は0.1%水準で「家族での外出を好む」「戸外で遊ぶ」「友だちを家につれてくる」、1%水準で「親の行動に興味を持つ」であった。また、6年時が高い項目は5%水準で「よく勉強をしている」であった。

母親は3年時では6年時に比べて、戸外で遊び、家族との時間を好み、親の行動に興味を持つなど家族や親との距離が近いと感じている。また、6年時は3年時よりも勉強に力を入れていると感じている。

## 2) 子育て観について

母親の子育て観についての学年差を、表2に示す。これによると有意差が見られる項目が4項目あり、3年時が高い項目は1%水準で「子育てでくたくたになる」、5%水準で「子どもに感情的に接してしまう」であり、6年時が高い項目は0.1%水準で「子どもをうまく育てている」、1%水準で「子どもがいることで生活にゆとりを感じる」となっていた。

子育てに関して母親は6年時より3年時にストレスを感じ、6年時には満足感やゆとりを感じている。

表2 子育てについての母親の意識(学年比較)

項目	学年	度数	平均値	標準偏差	t	有意確率(両側)
自分は子どもをうまく育てていると思う	3	992	2.77	.786	-3.810	***
	6	964	2.90	.821		
子どもの寝顔をみてかわいいと思う	3	1001	4.73	.534	1.876	n. s.
	6	967	4.68	.598		
子育てで、どうしたらいいかわからなくなることがある	3	1001	2.90	.944	.295	n. s.
	6	967	2.89	.963		
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	3	1000	2.79	.865	.528	n. s.
	6	967	2.77	.951		
自分一人で子育てをしているという圧迫感を感じる	3	998	2.09	.903	.273	n. s.
	6	964	2.08	.916		
子育てによって自分が成長していると感じる	3	999	3.88	.947	-1.073	n. s.
	6	967	3.92	.936		
子どもを育てるために我慢ばかりしている	3	998	2.23	.736	1.057	n. s.
	6	966	2.19	.768		
子どもがいることで、生活の中にゆとりを感じる	3	996	3.14	.998	-2.871	**
	6	966	3.27	1.002		
子育てで毎日くたくたになる	3	1001	2.47	.867	2.732	**
	6	967	2.36	.899		
子どもに感情的に接してしまう	3	998	3.07	.838	2.479	*
	6	966	2.98	.839		
毎日はりつめた緊張感がある	3	998	1.84	.789	1.252	n. s.
	6	968	1.79	.777		

t検定 \*P<.05 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

## 2. 子どもの性別による比較

### 1) 子どもの日常生活について

学年別に、母親が捉えた子どもの日常生活の男女差を表3に示す。これによると3年時の日常生活項目では「家庭での会話」「手伝い」「家族での外出」「弟妹の面倒」「勉強」など10項目中8項目が0.1%

表3 子どもの日常生活についての母親の意識(男女比較)

項目	性	3年時					6年時				
		度数	平均値	標準偏差	t	有意確率(両側)	度数	平均値	標準偏差	t	有意確率(両側)
学校での出来事をよく話す	男	513	3.69	.933	-5.564	***	489	3.62	1.032	-7.287	***
	女	484	4.01	.895			474	4.08	.915		
親子でよく会話をする	男	513	3.95	.794	-4.226	***	490	3.93	.855	-5.116	***
	女	485	4.16	.785			475	4.20	.817		
お手伝いをよくしてくれる	男	513	3.13	.941	-6.857	***	490	3.26	.995	-3.381	**
	女	485	3.55	.956			475	3.48	1.034		
家族で外出することを好む	男	512	3.80	.978	-5.891	***	490	3.65	1.064	-4.601	***
	女	485	4.15	.857			474	3.95	.928		
親の行動に興味を持っている	男	513	3.67	.870	-5.890	***	490	3.54	.931	-5.195	***
	女	484	3.99	.862			474	3.85	.918		
弟妹や小さい子どもの面倒をよく見てくれる	男	510	3.45	1.036	-4.619	***	487	3.46	1.080	-4.456	***
	女	481	3.75	1.032			468	3.77	1.109		
天気の良い日は戸外で良く遊ぶ	男	513	4.04	1.006	-.140	n. s.	490	3.84	1.082	3.574	***
	女	485	4.05	.915			475	3.60	1.083		
友達をよく家に連れてくる	男	512	3.37	1.168	1.933	+	487	3.11	1.138	.563	n. s.
	女	483	3.23	1.107			475	3.07	1.137		
いろいろな本をよく読んでいる	男	511	3.11	1.111	-4.455	***	489	3.01	1.133	-6.225	***
	女	485	3.42	1.076			473	3.47	1.123		
よく勉強をしている	男	512	2.94	1.012	-3.722	***	489	2.97	1.051	-5.348	***
	女	484	3.17	.987			474	3.33	.999		

t検定 +P<.01 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

水準で、また6年時では10項目中9項目が0.1%水準で女兒の平均値が有意に高く、学童期の子どもの日常生活に対する母親の意識に性差があるということが明らかになった。

2) 子育て観について

母親の子育て観に関しては3年時、6年時いずれにおいても性差は見られなかった。つまり学童期では子どもを育てるということに関して、子どもの性による違いは見られなかった。

3. 父親の意識との比較

1) 子どもの日常生活について

母親の子どもの日常生活について意識を父親の意識を比較したものを表4に示す。これによると、3年時では5%水準の有意差が見られた項目は「出来事を話す」「よく会話する」であり、6年時では「本を読む」であり、いずれも母親の得点が父親よりも高かった。

2) 子育て観について

母親の子育て観を父親の子育て観と比較したも

表4 子どもの日常生活についての父親・母親比較

項目	親	3年時					6年時				
		度数	平均値	標準偏差	t	有意確率(両側)	度数	平均値	標準偏差	t	有意確率(両側)
学校での出来事をよく話す	母親 父親	1000 44	3.85 3.55	.928 .975	2.106	*	966 41	3.85 3.59	1.002 1.117	1.635	n. s.
親子でよく会話をする	母親 父親	1001 44	4.05 3.80	.795 .904	2.050	*	968 41	4.06 3.90	.847 1.020	1.186	n. s.
お手伝いをよくしてくれる	母親 父親	1001 44	3.34 3.09	.969 1.007	1.643	n. s.	968 41	3.37 3.27	1.020 1.141	.640	n. s.
家族で外出することを好む	母親 父親	1000 44	3.97 3.70	.936 1.025	1.847	+	967 41	3.80 3.71	1.010 1.146	.549	n. s.
親の行動に興味を持っている	母親 父親	1000 44	3.83 3.57	.879 .998	1.907	+	967 41	3.69 3.44	.937 1.141	1.690	+
弟妹や小さい子どもの面倒をよく見てくれる	母親 父親	994 44	3.60 3.30	1.043 1.002	1.883	+	958 39	3.61 3.59	1.104 1.019	.134	n. s.
天気の良い日は戸外で良く遊ぶ	母親 父親	1001 44	4.04 3.82	.961 1.105	1.522	n. s.	968 41	3.72 3.63	1.088 1.113	.501	n. s.
友達をよく家に連れてくる	母親 父親	998 44	3.30 3.11	1.139 1.083	1.045	n. s.	965 41	3.09 3.02	1.136 1.037	.387	n. s.
いろいろな本をよく読んでいる	母親 父親	999 44	3.26 3.02	1.103 1.023	1.402	n. s.	965 41	3.24 2.85	1.151 1.038	2.109	*
よく勉強をしている	母親 父親	999 44	3.05 3.00	1.006 1.012	.323	n. s.	966 41	3.15 3.02	1.040 1.129	.749	n. s.

t検定 +P<0.1 \*P<0.05

表5 子育て観についての父親・母親比較

項目	親	3年時					6年時				
		度数	平均値	標準偏差	t	有意確率(両側)	度数	平均値	標準偏差	t	有意確率(両側)
自分は子どもをうまく育てていると思う	母親 父親	992 44	2.77 2.98	.786 .731	-1.749	+	964 41	2.90 2.98	.821 .935	- .539	n. s.
子どもの寝顔をみてかわいいと思う	母親 父親	1001 44	4.73 4.70	.534 .668	.249	n. s.	967 41	4.68 4.51	.598 .675	1.723	+
子育てで、どうしたらいいかわからなくなることがある	母親 父親	1001 44	2.90 2.64	.944 1.080	1.830	+	967 41	2.89 2.68	.963 1.059	1.352	n. s.
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	母親 父親	1000 44	2.79 2.93	.865 .950	-1.060	n. s.	967 41	2.77 2.83	.951 1.093	- .399	n. s.
自分一人で子育てをしているという 圧迫感を感じる	母親 父親	998 44	2.09 1.84	.903 .834	1.826	+	964 41	2.08 1.83	.916 .803	1.746	+
子育てによって自分が成長していると感じる	母親 父親	999 44	3.88 3.59	.947 .871	1.973	*	967 41	3.92 3.80	.936 1.054	.790	n. s.
子どもを育てるために我慢ばかりしている	母親 父親	998 44	2.23 2.34	.736 .776	- .980	n. s.	966 41	2.19 2.10	.768 .735	.786	n. s.
子どもがいることで、 生活の中にゆとりを感じる	母親 父親	996 44	3.14 3.48	.998 .952	-2.188	*	966 41	3.27 3.66	1.002 .855	-2.437	*
子育てで毎日ぐたぐたになる	母親 父親	1001 44	2.47 2.23	.867 .859	1.793	+	967 41	2.36 2.00	.899 .671	2.519	*
子どもに感情的に接してしまう	母親 父親	998 44	3.07 2.86	.838 .668	1.643	n. s.	966 41	2.98 2.95	.839 .893	.217	n. s.
毎日はりつめた緊張感がある	母親 父親	998 44	1.84 1.77	.789 .859	.540	n. s.	968 41	1.79 1.76	.777 .538	.313	n. s.

t検定 +P<0.1 \*P<0.05

のを表5に示す。これによると、3年時では6項目に5%水準での有意差あるいは10%水準で傾向が見られ、母親が高い項目は「どうしたらよいかわからなくなる」「圧迫感を感じる」「自分が成長している」「くたくたになる」であり、父親が高い項目は「うまくそだてている」「ゆとりを感じる」であった。また、6年時では4項目で5%水準の有意差あるいは10%水準の傾向が見られ、母親が高い項目は「くたくたになる」「寝顔がかわいい」「圧迫感を感じる」であり、父親が高い項目は「ゆとりを感じる」となっていた。

#### IV. 考察

今回、母親が学童期の子どもの日常をどのようにとらえていたか、また、子育てをどのように感じていたかについて、まず始めに、子どもの学年が学童期中期の小学3年時と学童期後期の小学6年時での比較調査を進めた。

それによると母親は3年児は外で活発に遊び、親に興味を持ち、家族と共にいることを好み、友だちを家に連れてくるなど、6年児に比べて家族や家庭との繋がりが強いと感じていた。また、子育て観は3年児では、くたくたになる、感情的に接するなどストレスを感じている様子が伺える。

これに対して6年児の日常生活では、よく勉強をしていると感じ、子育て観では、うまく育てている、ゆとりを感じるというように、子育てに対するストレスが軽減されている様子が伺える。

このことは、はじめにでも述べたように学童期中期3年時は、乳幼児期に比べ身体的保護の必要性は軽減されるものの、母親は子どもの世話に時間を掛け、欲求により早く反応していることを現しているものと思われる。従って、3年時の子育て観は、大変だという感じがあったものだと考える。それが6年時になると母親は3年時よりも、よく勉強をしているなど、子どもの自立、自律した姿を捉えており、その姿は、母親自身の子育て観に反映して、うまく育てている、ゆとりを感じる、というように余裕と自信に繋がっていると考える。したがって、この時期には乳幼児期から続いた子どもの身体的保護として世話をするという感覚から脱却するのではないかとと思われる。

学童期中期3年時から学童期後期6年時にかけて、母親は子どもが親や家族の手を煩わせず、勉強を初め自律的に行動するようになることで、育児がストレスから育児への自信に変化していくものと考えられる。

次に、母親が捉えた子どもの性差について、子どもの日常生活においては3年時、6年時ともにほとんどの項目で男児、女児の違いを感じていた。その内容を見てみると、学校での出来事を話す、親子で会話する、手伝いをする、家族での外出を好む、弟妹の面倒をみる、いろいろな本を読んでいる、よく勉強している、であり、家庭内での会話や手伝い、弟妹の世話、家族との外出を好むなど、女児は男児に比べて家族や母親との距離が近いと感じていることがわかる。

また、学童期においては、本を読む、勉強をするという学習活動についても女児が高く、逆に、天気の良い日は戸外で遊ぶ、友だちを家に連れてくるなどの遊び活動に関しては男児の方が多くと捉えられている。教育現場では男女平等意識の達成の第一歩として、男女同様の活動や男女の役割分担の廃止が進められている中、家庭内において母親は女児の方が、手伝いをし、弟妹の面倒をみる、と感じている。このことは、家庭での母親の期待に子どもが答えているということも考えられ、現代の母親にも家庭生活の中では、男子は外で仕事、女子は家庭で家事という日本の伝統的な感覚が存在している可能性が高いのではないかと考える。この点においては、児童期後期の第二次性徴期に性による変化が顕著になる時期においても、男女の活動や役割の同等性を求める教育現場との乖離を表しているように思われる。

最後に母親と父親の比較では、子どもの日常生活では3年時に父親よりも母親との会話が多いことが示唆された。また、子育て観に関しては子どもがいることで父親は母親に比べ「ゆとり」を感じ、母親は「くたくたになる」「感情的に接する」など、両親の家庭内での子育て観に差があることが分かった。この点について上田(1996)は「父親は遊び相手になり身体的遊びを通して接触し友だちのようにかかわることが多い」と述べている。つまり、学童期の子どもは日常的に母親と過ごす時間が長く、母親は

子どもの行動や様子に関する問題解決に直接的な責任感や対応を迫られることが多いのに対して、父親は仕事から離れた限られた時間の中の遊びという感覚の中で子どもと触れ合っている可能性が高いことから両親の子育て観に違いが生まれるのではないだろうか考える。

## V. おわりに

今回は学童期中期から後期にかけての、母親の子どもの日常生活意識と子育て観の変化について検討した。母親は学童期中期の段階では、幼児期と同じように世話をしている状況が伺えるが、後期になると子どもが自立的・自律的に成長し、それに伴って母親自身が自分の生活にゆとりや自信を持つようになると考える。つまり、子どもと親の距離が次第に離れて、児童期後期においては親の子どもに対する直接的な影響が減少することが考えられる。このことは、学童期前期までは見出だされた母親の子育て支援としてのブックスタート経験の有無による子どもの日常活動の差が、学童期後期には見出されなかった一つの原因だと考えられる。

また、子どもの性による差として、母親は日常生活場面で女兒との距離が近く、学童期中期にはすでに、手伝いや世話などの、いわゆる母親的役割を男児よりも女兒が取っていると感じている。

また、父親との子育て観には差が見られ、母親は父親よりもストレスを感じている様子が示唆され、家庭内では子どもも親も性による役割分担が存在している様子が伺われた。

今回の結果は、一部地域における調査ということで地域性を現しているということも考えられるが、それでも縦断的に継続して変化を捉えていくことには意義があると考えられる。

また、各親子の関係性を対応させて検討することは難しいが、今後、中学生になり子どもの生活が、より学校、学業中心になることが考えられる中で母親が子どもの日常をどのように捉え、どのような子育て観を持つようになるのか、また、子どもは体験学習をはじめとして幼児や様々な人や物と接する中でその生活意識が親のブックスタート経験の有無によって異なるのかどうかを平均値比較ということで

引き続き検討していきたいと考える。

謝辞：本研究では、小郡市ブックスタート事業3年生児童、6年生児童の保護者データを使用させていただきました。小郡市長をはじめとして質問紙作成、配布、回収を頂きました小郡市ブックスタート事業関連の皆様にお礼申し上げます。

## VI. 文献

- 秋田喜代美.(2008). 読む力が育つ授業作りの課題. 第19回国語教育研究実践交流会報告.pp61-67
- 第1回ブックスタート全国大会.(2002). 特定非営利活動法人 ブックスタート支援センター. 読書環境意識調査報告書.(2001). 恵庭子ども読書推進ネットワーク開発実行委員会.
- 原崎聖子, 篠原しのぶ.(2005). 母親の乳幼児養育に関する調査-ブックスタート事業との関わりから-. 福岡女学院大学紀要人間関係学部第6号.59-68.
- 原崎聖子, 篠原しのぶ.(2006). 母親の乳幼児養育に関する調査-ブックスタート事業18ヶ月児を中心に-. 福岡女学院大学紀要人間関係学部第7号.23-28.
- 原崎聖子, 篠原しのぶ, 安永可奈子.(2007). 母親の乳幼児養育に関する調査-ブックスタート事業36ヶ月児を中心に-. 福岡女学院大学紀要人間関係学部第8号.73-82.
- 原崎聖子, 篠原しのぶ, 彌永和美.(2010). 就学前児の家庭における読み聞かせ環境の調査-ブックスタート事業との関係-. 福岡女学院大学紀要人間関係学部第11号.53-60.
- 原崎聖子, 篠原しのぶ, 彌永和美.(2012). ブックスタート追跡調査からみる親子関係の特徴と学童期への影響について. 福岡女学院大学紀要人間関係学部第13号.29-34.
- 原崎聖子, 篠原しのぶ, 彌永和美, 渡邊晴美.(2013). ブックスタート追跡調査からみる保護者の意識と学童期への影響について-小学校3年生を対象として-. 福岡女学院大学紀要人間関係学部第14号.15-25.
- 原崎聖子, 篠原しのぶ, 彌永和美, 渡邊晴美.(2015). 学童期における生活意識の追跡調査-小学3年

時と6年時の比較－.福岡女学院大学紀要人間関係学部第16号.19-23.

原崎聖子,篠原しのぶ,彌永和美,渡邊晴美.(2016).  
ブックスタート経験が保護者及び児童に与える影響－小学6年時追跡調査－.福岡女学院大学紀要人間関係学部第17号.61-68.

文部科学省.(2010).小学校学習指導要領解説  
総則編.pp.37,52-55,69-70.東洋館出版.

NPOブックスタート(編).(2010).「赤ちゃん  
絵本をひらいたら」-ブックスタートはじまりの10  
年-.岩波書店.

NPOブックスタート(編).(2014).「ブックスター  
トがもたらすもの」に関する研究レポート.NPO  
ブックスタート

NPOブックスタート Bookstart Japan

<http://www.bookstart.or.jp/> 2016-09-30.

大平勝馬(編).(1983).新版児童心理学.  
pp.51,62,82,90-94.建帛社

上田礼子.(1996).生涯人間発達学 p. 149





## ○福岡女学院看護大学紀要投稿内規

2010(平22)年3月11日制定  
最終改正 2015(平27)年9月10日

### (趣旨)

**第1条** この内規は、福岡女学院看護大学紀要委員会規程第10条に基づき、投稿に必要な事項を定めるものとする。

### (投稿及び著者資格)

**第2条** 投稿論文は、他の雑誌に未掲載のものに限る。

- 2 投稿者は原則として、本学教員(助手・旧専任教員を含む)に限る。ただし、共同研究者の場合はこの限りではない。
- 3 投稿された研究において大きな知的貢献を果たした人物を著者とする。著者資格とは、以下3つの項目のすべてを満たしていなければならない。
  - (1) 研究構想及びデザイン、データ収集、データ分析及び解釈において相応の貢献があった。
  - (2) 論文の作成または重要な知的内容にかかわる批判的校閲に関与した。
  - (3) 投稿論文の最終確認を行った。
- 4 投稿論文には前項の著者資格を満たす人物すべての名が列挙されていなければならない。
- 5 著者資格の基準を満たさない研究貢献者は、謝辞の項に列挙するものとする。

### (倫理的配慮)

**第3条** 人及び動物を研究対象とする場合は、研究対象に対する倫理的配慮がなされ、そのことを論文中に明記するものとする。

- 2 研究に当たって投稿者は、前項に掲げる研究対象については、あらかじめ研究倫理委員会の承認を得ておかななければならない。
- 3 投稿者は、研究倫理委員会承認の証明書の提示を求められたときは、それに応じなければならない。

### (論文の種類)

**第4条** 論文の種類及び内容は、次のとおりとする。

- (1) 総説 特定のテーマについて多面的に内外の知識を集め、又は文献的にレビューして、当該テーマについて総合的に学問的状況を概説したもの
- (2) 原著 論文研究そのものが独創的で、新しい知見が論理的に示されているもの
- (3) 研究報告 内容的には原著論文には及ばないが、研究結果の意義が大きく、本学での研究及び教育の発展に寄与するもの
- (4) 実践報告 教育及び活動に関する実践の報告として意義があり、本学での研究及び教育の発展に寄与するもの
- (5) 資料 調査資料及び学術的に有用と思われる資料等を取りまとめたもので、研究の参考となるもの
- (6) その他
  - イ 本学での教育に関係するもので、紀要委員会が適当と認めたもの
  - ロ 紀要委員会からの依頼によるもの

#### (投稿方法)

**第5条** 紀要委員会を投稿先とする。

#### (原稿の採否)

**第6条** 原稿の採否は、査読を経て紀要委員会が決定する。

2 査読により、原稿の修正および原稿の種類の変更を著者に求めることがある。

3 査読により「不採用」と通知された場合で投稿者が明らかに不当と考える場合にはその理由を明記して紀要委員長宛に異議申し立てをすることができる。

4 査読後、期限までに原稿の修正および原稿の種類の変更が提出されない場合は投稿の取り下げとみなす。

#### (校正)

**第7条** 校正は、初稿のみ執筆者が行う。ただし、内容の変更は認めない。

#### (掲載)

**第8条** 掲載料は、原則として無料とする。

#### (転載及び出版)

**第9条** 紀要で発表した論文を著者が他の雑誌へ転載し、又は単行本として出版する場合には、あらかじめ紀要委員長に願い出て、紀要委員会の議を経て、その許可を受けなければならない。

#### (著作権)

**第10条** 紀要に掲載された論文の著作権は、福岡女学院看護大学に帰属し、掲載後は本学の承諾なしに他誌に掲載することを禁ずる。

2 投稿者は、本学が紀要に掲載された論文を電子化し、インターネット等に公開することについて了解の上寄稿するものとする。

#### (執筆要領)

**第11条** 執筆要領は、次のとおりとする。

(1) 原稿は、和文又は英文とし、白のA4判用紙に11ポイントで、和文23字×42行×2段、英文46字×42行×2段を1頁とする。

(2) 投稿論文は、正1部、副1部(図表を含む)計2部を提出し、原則としてデータを添える。ただし、副については、写真を除くコピーの提出を認める。

(3) 論文の種類別の制限頁および英文表題・要旨の有無については別表1に定める。制限頁を大幅に超過する場合は原稿を返却することがある。

(4) 原著論文及び報告の原稿は、表紙、本文、図、表の順とする。原著論文及び報告の表紙には、要旨を挟んで、別表2の内容を記載する。要旨は、和文600字程度、英文300語程度とする。要旨は〔目的〕〔方法〕〔結果〕〔考察〕に分けて見出しをつけて記載する。

(5) 本文は原則として、緒言(はじめに)、方法、結果(活動結果)、考察、結語(おわりに)、文献の順とする。謝辞等を入れる場合は、結語と文献の間とする。原稿の構成については原則として別表3のとおりとする。

下記表で構成されない場合は投稿時にその理由を付す。

- (6) 図(写真を含む)表は、原則としてそのまま掲載できる明瞭なものとし、図1、表1のように番号を付け、本文と離して別紙とする。別紙の図表は1頁に1つとする。図表を組み込む場所は本文の欄外に朱記する。
- (7) 数量の単位は、国際単位系(SI)を使用し、数字はすべてアラビア数字(算用数字)を用いる。
- (8) 文献は2段組みとし、番号はつけない。数行にわたる場合は、一文字下げる。
- (9) 文献の記載方法は、別表4に従う。

**(改廃)**

**第12条** この内規の改廃は、紀要委員会の議を経て運営会議が行う。

**附則①**

この内規は、2010(平22)年4月1日より施行する。

**附則②**

この内規は、2012(平24)年10月11日から施行する。

**附則③**

この内規は、2015年(平27)年9月10日から施行する。

**別表1(第11条第3号関係)**

論文の種類	制限頁 (図・表込)	英文表題	要旨 (日本語)	要旨 (英語)
総説	7頁	○	○	○
原著	10頁	○	○	○
研究報告	10頁	○	○	○
実践報告	10頁	○	○	
資料	6頁	○		
その他	6頁	○		

**別表2(第11条第4号関係)**

要旨の上部	表題、英文表題、著者名(ローマ字でも記載)、所属機関、図・表及び写真の枚数、キーワード5個以内(日本語・英語) 著者名の所属機関が同じ場合は上付き数字(○ <sup>1)</sup> )で表す。
要旨の下部	希望する論文の種類、連絡者の氏名、連絡先(特に本学の元教員が投稿した場合)、紀要委員会の連絡事項

**別表3の1(第11条第5号関係)**

総説、原著、研究報告の構成

項目	内容
緒言	研究の背景、目的
方法	研究、調査、実験、解析に関する手法の記述、材料の集め方など
結果	研究等の結果
考察	結果の考察、評価
結語	結論
謝辞(省略可)	謝辞、研究助成や便宜供与など
文献	

### 別表3の2 (第11条第5号関係)

実践報告、資料、その他の構成

項目	内容
緒言 (はじめに)	実践の背景や目標、報告の目的
方法	使用した資料、実践の対象、検討の方法など
結果	内容や取り組みの特徴、実践の結果
考察	実践の評価、得られた知見や課題、他に応用できる点など
結語 (おわりに)	結論、今後に向けた示唆など
謝辞 (省略可)	謝辞、研究助成や便宜供与など
文献	

### 別表4 (第11条第9号関係)

#### ■本文中の引用

①本文中の引用箇所には、著者名の姓、西暦文献発行年を付けて表示する。ただし、姓のみで区別がつかない場合は、フルネームで表示する。また、著者が団体や組織の場合は、原典に記載されている名称を表示する。

例) 福女(2013)の報告によると、…。

…と報告されている(福女,2013)。

…と報告されている(福女,古賀,2013)。

②共著者が3名以上の場合は、筆頭著者名のみ「ら」を付して表示する。

例) 福女ら(2013)の報告によると、…。

③複数文献を引用した場合には、(古賀,2012;福女,2013)というように筆頭著者のアルファベット順に表示し、間に;を入れる。

④同一著者による、同じ年に発行された異なる文献を引用した場合は、発行年にアルファベットを付し、これらの文献を区別する。

例) 福女(2013a)によると…である。また、別の研究では…であることが明らかにされている(福女, 2013b)。

⑤同一文献の異なるページを引用した場合は、発行年の後ろのページ数を書き添えて引用箇所を明確にする。

例) 福女(2013)によると…である(p.10)。さらに、…であることも明らかにされている(福女,2013,p.14)。

⑥翻訳本から引用した場合は、原著者名(原書発行年)/翻訳書発行年を表示する。

例) Fukuoka(2000/2013)

#### ■本文末の文献リスト

①文献は筆頭著者名のアルファベット順に列記する。ただし、共著者は3名まで表記し、以下は「他」又は「et al.」とする。

②和文名と欧文名は同一基準で取り扱い、和文名をヘボン式ローマ字で記載した場合の比較で列記の順序を定める。

③和文原稿の場合は、ローマ字および数字、単位は半角文字を使用し、「( )」「-」「/」「,」「;」は半角記号とする。

④欧文原稿の場合は、すべて半角文字を使用する。

⑤学術誌名は省略せずに正式名称で表示する。

### <記載書式例>

#### 雑誌の場合

著者名(西暦発行年).表題.雑誌名,巻(号),開始ページ-終了ページ.

例) 福女花子,古賀千鳥,女学院看護他.(2013).ヒューマンケアリング.福岡女学院雑誌,5(1),41-51.

Fukuoka,H.,Koga,T.,Jogakuin,K.et al.(2013). Human caring,Journal of Fukuoka Jo Gakuin, 5(1),41-51.

#### 書籍の場合

著者名(西暦発行年).書籍名.引用箇所の開始ページ-終了ページ,出版社名,出版地.

例) 福女花子.(2013).ヒューマンケアリング. 41-74,福岡女学院出版会,福岡.

#### 翻訳書の場合

原著者名(原書発行年)/訳者名(翻訳書発行年).翻訳書名.引用箇所の開始ページ-終了ページ,出版社名,出版地.

例) Fukuoka,H.(2000)/古賀千鳥訳(2013).ヒューマンケアリング.41-74,福岡女学院出版会,福岡.

#### 編集本の場合

編者名(編).(西暦発行年).書籍名.引用箇所の開始ページ-終了ページ,出版社名,出版地.

例) 福女花子(編).(2013).ヒューマンケアリング.41-74,福岡女学院出版会,福岡.

#### 電子文献の場合

著者.タイトル.検索年月日.URL

例) 厚生労働省.ヒューマンケアリング.2013-05-17.



## 編集後記

皆様のご協力のもと第7号を発刊することができました。今年度は投稿期間を見直し、関係者のご理解を得ながら査読や修正の期間短縮を図って参りました。皆様方のご尽力に心より感謝申し上げます。教育と研究の成果を社会に発表する場としての紀要の意義を確認しながら、委員会として新たな取り組みを進めて参りたいと考えております。

(福澤雪子)

---

## 紀要委員会

委員長 福澤 雪子

委員 森本 正敏      原崎 聖子      山田 沙織  
         吉武美佐子      吉野 拓未

事務部 大石 定和      城戸 和子

---

## 福岡女学院看護大学紀要 第7号

2017年3月

編 集 福岡女学院看護大学紀要委員会

発 行 福岡女学院看護大学  
〒811-3113 古賀市千鳥1-1-7  
TEL092-943-4174(代)  
<http://www.fukujo.ac.jp>

印 刷 株式会社 ミッションサポート  
〒811-1313 福岡市南区日佐3-42-1  
TEL092-575-2551

---





# Bulletin of Fukuoka Jo Gakuin Nursing University

Vol.7 , 2016

## CONTENTS

### **【Review】**

Laboratory Animals Contributed to Human Health  
—Presentation of Disease Animal Models—

Masatoshi Morimoto

### **【Practical Report】**

Podcasting for Nursing English  
—A method for improving listening comprehension and expanding vocabulary—

Mathew PORTER

### **【Materials】**

Survey study of mothers' consciousness of their school aged children

Seiko Harasaki , Shinobu Shinohara , Kazumi Iyonaga , Harumi Watanabe

Guidelines for Authors

Editorial Notes